

# 大学ではまだ答えの見つからない、 あるいは複数の答えのある 世界に分け入っていかなければならない。

京都大学 総長  
国立大学協会 会長

## 山極 壽一 先生

Juichi Yamagiwa

1952年東京都生まれ。理学博士。人類学者、霊長類学者。75年京都大学理学部卒。77年京都大学大学院理学研究科修士課程修了。80年同大学院理学研究科博士後期課程退学。80年日本学術振興会奨励研究員。83年財団法人日本モンキーセンターリサーチフェロー。88年京都大学霊長類研究所助手。98年京都大学大学院理学研究科助教授。2002年同教授。11年同大学院理学研究科長・理学部長。12年京都大学経営協議会委員。14年第26代京都大学総長。17年6月国立大学協会会長。

**世** 世界的なゴリラ学者、霊長類学者として知られ、2014年10月には戦後生まれとしては初となる、第26代京都大学総長に就任した山極壽一総長。学生と教員が一緒になって「おもしろいこと」を発想する。それも全力で、真剣に——。そう宣言し、京都大学の将来構想「WINDOW」のもと、世界水準の研究大学として“学生を第一に考えた”改革に意欲的に取り組んでいます。その、山極総長の熱い眼差しの向こう側には、どのような風景が広がっているのでしょうか。若い世代に向けて、メッセージを贈っていただきました。

——山極先生が考える「大学の学び」とはどのようなものでしょうか。

初等・中等教育というのは、カリキュラムに沿って習得しなければならない知識を正しく伝え、その正しい答えをなるべく速やかに出すという学習能力が求められています。でも、それらはすべて高校の教科書に載っていることなんですね。

ところが、大学に入った途端に、まったく違う展開になる。自分で問いを立てなければならない。まだ答えの見つからない、あるいは複数の答えがある世界に入っていかなければならない。分かっていることを理解しなくてはならないのですが、実はそれこそが重要なのです。

### 生きた知識は 人間の中にこそある

——自分なりの問いと答えを見つけなければならないのですね。

私が学生の時代は、図書館が知識の宝庫であって、そこに行けば、自分の知らないたくさんの知識に出合えた。だから図書館に通い、講義に出る。それが、大学というものを利用する大きな比重を占めていました。

でも今の学生たちには、インターネットという世界がある。そこが辞書となり、知識伝達の場所となる。自分が欲する知識は、キーワードを入れさえすれば得られるわけです。

それはどういうことか。「問いと答えが瞬時に結びつく」世界に生きているということです。インターネット相手だと、そこで考える、自分なりの問いや答えを考えるということが難しい。そこを、大学では教師や仲間たちがうまく繋いでいかなければならない。

生きた知識というのは、インターネットの世界の中にあるのではなくて、人間の中にあるわけです。だからこそ、問いや答えに付帯するさまざまな知識が意外な形で結びつくわけです。個人の経験や個人の考えに立っている、これまでの体験に埋もれている生きた知識を発掘し、互いに交換しあうことこそが、大学という場所のできることなんです。

——先生が総長を務める京都大学では、教育に関する基本理念として「対話を根

幹とした自学自習」を掲げています。

学問は対話である。まさにこれは、ギリシャ哲学の有名なソクラテスとプラトンが実践したように、対話というものを根幹としながら問いや答えを紡いでいく習慣をつくっていかなくてはならない。それができるからこそ、世界の中に出ていくことができるのです。

### 自分が信じていることは 決して諦めてはいけない

——京都大学には、世界レベルの研究者が多数在籍されています。

本学は確かに、ノーベル賞受賞者ですとかフィールズ賞、ガウス賞のように、世界的権威のある賞の受賞者をたくさん輩出してきましたが、そういう先生方がまだ現役で活躍していらっしゃる。そういう人たちと接することは、とても貴重な体験です。

たとえば、昨年京都賞を取られた本庶佑先生（京都大学名誉教授）。5月からは特別教授として、京都大学の高等研究院で活躍されています。

また、理学研究科で教授をされている森和俊先生はガードナー賞ですとかラスカー賞などを受賞されていますが、実際に学生を教えられています。

このお二人と接していて分かるのは、成功ばかりではなかったことです。時には静かに、時には激しく、さまざまな学問的論争を経ながら今日まで至ってこられた。そこにあるのは、自分のやっていること、自分が信じていることを諦めない姿勢です。もちろん、そこに執着していても間違いは起こるわけですから、間違いは間違いとして認めなければいけない。しかし、自分が見たことをいかに信じるかということが大切なのです。

科学者の本当の喜びというのは、突然やって来ます。それは、賞を取るということではなくて、自分が追求めてきた「青い鳥」がある瞬間、自分のもとに舞い降りてくる瞬間があるのです。そういう時を体験するというのは、人生の中で何回もあるものではありません。

でも、その瞬間、つまり誰もこれまで見ていなかったこと、考えてこなかったことがすっと見えた、あるいは分かったという瞬間。そのおかげで世界が変わっ

て見える、あるいは、これまでの常識が完全に覆されるということが起こる時は、本当に至福の時なのです。

### さまざまなスケールで モノを見るとということ

研究者というのは商売ではないし、社会的な地位でもない。給料を貰っていない研究者はたくさんいるわけだし、研究者イコール教授だとか、職がつくものを目指すわけではない。自分が知りたいと思う対象を見つけ、一生追いかけることのできる人、それが研究者なのです。

私はよく「縮尺」ということを問題にするのですが、目の前で追い求めていることと、もう少し大きな視野で、たとえば地球規模、あるいは宇宙も入れて、人間全体というふうにも考えてもいいし、生命というふうにも考えてもいいし、そういう大きな尺度でモノを考える。両方を考えながら、研究を進めていくことが重要なのです。

私自身で言えば、ゴリラの研究を長年にわたって行ってきました。目の前にいるゴリラが何をしたか、ということが当面の研究テーマなのだけれど、でも知りたいのはゴリラだけではなくて、ゴリラと共通の祖先を分かち合う人類の進化の話なわけですね。そこからヒントを得られる。これまで考えられてきたことが覆ると、人類の進化もこんな展開をしてきたのだろうか、ということが分かるから面白い。ゴリラの研究をしているんだけど、人類の進化だとか生物の進化とか、全体を常に見つめる視野を持ちながら研究を行っているのです。

### 高校生の段階で、将来を 急いで考えなくてもいい

——研究者を目指すためには、何歳から努力を始めるべきでしょうか。

例えばオールジャパンでスポーツ振興を図り、卓越した若者を育てる。あるいは芸術もそうですが、若いうちに天才を見抜いてピアニストを育てよう、ということがあります。

もちろんそれはいいことだと思う。個性や、持って生まれた能力があるわけで



ラとピグミーの森』(岩波新書)。大学2年のときにたまたま読んで、すごい本だなと思い、ふと著者を見たら、理学部にいるじゃないか。それで、すぐに会いに行きましたね。

これは私のバイブルのような本です。1960年に伊谷先生がケニアからコンゴ、タンザニアへと旅した本なんです。車を借りて赤いノーで旅して行くんだけど、60年というのはアフリカ諸国が独立を果たした年(「アフリカの年」)で、どこに行っても独立の気運が満ち満ちていて、そこに伊谷先生は偶然立ち会うことになる。

ケニアだとイギリス人、インド人、ケニア人が三つ巴で関係を持っているわけですね。イギリス人はインド人を使ってアフリカ人を支配させている。そこで、伊谷先生がインド人が経営するパーに行つて、アフリカ人とインド人のパーティーとで飲むシーンがあるのですが、これが伊谷先生の真骨頂です。

伊谷先生は独立戦争の中を、自然科学者として入っていく。政治学者でも経済学者でもない。自然科学者がどんなふうに関わりを持ち、現地の人たちの思いを感じるかが、心臓がドクドクするくらいのタッチで書いてあるわけです。

しかも、ゴリラを見てピグミーを見て、これこそ人間の祖先につながるものなんだということを実感していく。それはまだ誰も経験したことのないものなのです。それまでモデルがない。



## もっと知りたい！ 山極壽一先生の著書

このコーナーでは、山極壽一先生の数多い著書のなかでも、『卓越する大学』編集部が特に受験生の皆さんにお薦めしたい本をご紹介します。興味のある方は、下記以外の著書もぜひ手に取ってみてください。

暴力はどこからきたか  
人間性の起源を探る  
(NHKブックス)

「サル化」する人間社会  
(知のトレッキング叢書)  
(集英社インターナショナル)

京大式 おもしろ勉強法  
(朝日新書)

都市と野生の思考  
※鷲田清一京都市立芸術大学学長との共著  
(集英社インターナショナル)

すから。しかし、学問の世界というのは、小さい頃に能力が決まるわけではない。いろんな世界を見て、引き出しをたくさん持って、自分がやりたいことにいつでも移れるフレキシビリティを持っているのです。だから、80歳になって大きな発見をする人だっているわけだしね。いうなれば長距離ランナーみたいなものです。

しかも、一つのことをずっと追い求めているわけではなくて、ある時体験したことが、まったく別のことをやったときにとても大きな役に立つことがあるのです。ですから広い知識と、それから、よくセレンディビティなんていうけれど、好奇心ですね。そういうものを持ち続け、それが自分独自の形になったときに、その人の能力が実を結ぶということなのだと思ふ。

何というか、ピラミッド式に、この知識がどんどん積み重なっていけばこうなるというシミュレーションができるものではないのです。スポーツやある種の芸術家のように、小さい頃からその能力を見出して、伸ばしていけばいいという教育の仕方では、学術の世界で活躍する人材は育てられない。

高校生の皆さんに言いたいのは、高校の段階で自分は何が得意だからそちらの方向に進もうって、そんなに拙速に考えなくていい。大学に入って、もし自分が選んだ分野が合っていないと思ったら、さっさと移っていいよ。大学時代には、そのために自分自身をゆっくりと見つめ直す時間が用意されています。とりあえず大学に入りなさい、ということはおきたいですけどもね。

## 人文社会科学の 復権の時代が来ている

——京都大学には湯川秀樹博士以来の、自然科学系の学問の伝統に加え、西田幾多郎や田辺元を始祖とする京都学派、哲学や人文社会科学の伝統があり、それが大きな魅力になっています。

京都大学で西田哲学が現れたのは、京都という場所による効果も大きいと思うのです。1300年の歴史があって、1000年前には世界初の女流文学を輩出し、3000を超える寺社仏閣が現存している。

少し歩けば歴史の厚みに触れることができる。

そういうところでないと、「無の思想」なんて出てこないと思う。深く深く世界を考え、しかも自然と接しながら、人間の命を超えた世界を思索することのできる場所ですよ。そういうところが学問の深みを作るのではないかな。

哲学や人文社会科学だけではなくて、自然科学の世界でも同じことが言える。「情緒の数学」ということが言われ始めているけれども、人間の心というものをどう理解すればいいか。かつて京大で活躍された岡潔先生もそうですが、今数学でも生物でも物理でも、「では心ってどういう物理現象なのか」ということを、真剣に考え始めている。

心って見えないじゃないですか。脳神経学者は脳にあると思っている。でも、生物を専門にしている研究者は、「脳を持たない生物だって学習する」ということを知っているわけです。

いかにして心の働きを捉えたらいいのか。身体と一致して動いているから中枢と呼んでいるわけだけれども、逆の作用だってある。身体から脳に来るという場合合ってるわけ、そういうことを一体となって討論し、考えていくことをしていかなければならない。

——現代は、人文社会科学にとって危機の時代と言われることもあります。

技術と経済というのは非常に相性がいから、そちらの方向ばかり進んで、人間の心の働きだとか、心と社会の結びつきが見え過ぎがちになっている。だからこそ、人文社会科学というのが軽視される風潮にあると思うのですが、それを復活させないといけない。むしろ「文理融合」というのは、そうした方面で相互に歩み寄りながら、社会を考えていかななくてはならないのではないかな。

学問というのは、時代の高みに登らなくてはならない。時代の先端を主導するわけではない。そのためには、今の常識ばかりを追いかけてはだめで、30年先、50年先の未来を予想しながら取り組んでいかななくてはならないのです。

「ソサエティー5.0」で言われているのは、IoTとAIとビッグデータ解析とロボット、この4つですよ。これがいま、未来を先導する世界の常識になっていますが、これらはすべて「技術」です。

もっと社会のあり方を考えるような、心の理論が出てこないと思つていてます。

## 優れた本には 人生を変える力がある

——大学受験を控える若い人たちに、お薦めの本をご紹介します。

私の師である伊谷純一郎先生(故人)が書かれた『自然がほほ笑むとき』(平凡社)。これは素晴らしい本です。

自然が観察者にほほ笑みかけてくれた瞬間というのが書いてあって、まさに私が体験したものと同じなのですが、長く辛いフィールドワークがあって、全然結果が出ないなと思ひながらやっている。そんな時に、ふっと不思議な現象が立ち上がってきて、「あれ？ これって一体？ ひょっとしたら」となるわけですよ。その瞬間が至福の時なんです。それは体験してみないと分からないけれど、その瞬間にそれまでの苦労なんかすべて報われるわけです。

それから、2010年に邦訳が出たフランス・ドゥ・ヴァール『共感の時代へ』(柴田裕之訳、紀伊國屋書店)。ドゥ・ヴァールはチンパンジーの研究者なのですが、共感というのは人間が言葉を発明してから文化としてつくりあげたものではなく、身体の進化の中で獲得してきた性質であると書いている。それがいかに使われるかということが、文化を決定する、ということを指摘している本で、高校生諸君にはぜひ読んでもらいたい。

現代は規則だとルール重視の社会になっているけれど、本当はルールや規則というのは、共感力さえ持っていれば必要ないんですね。共感力を方向づける何らかの基準、規範があればいい。でも、人類はその使い方が分からなくなっている、ルールがたくさん出てきた。これは私の主張でもあるのですが、ルールに頼っていると共感力は失われていく。それを『「サル化」する人間社会』(山極壽一著、集英社インターナショナル)という本の中でまとめています。

——先生が人類学の道に進むきっかけになった本は何ですか？

それは、これまでも何度か紹介したことがあるのですが、伊谷純一郎『ゴリ